

西大寺

称徳天皇（713～770）が、国の平和と安全を仏陀に祈るための場所として、8世紀に西大寺の建設を発願した。これは、孝謙天皇の父親である聖武天皇（701～756年）の発願によって建設された東大寺（奈良の大仏が祀られている寺）との対として構想された寺でもある。西大寺（大きな西の寺）は、平城（奈良の旧名）の都の皇居の西に建てられ、東大寺（大きな東の寺）は皇居の東に建てられた。西大寺の建設は765年にスタートし、780年まで続いた。これほど長い期間を要したのには、当初のその巨大な規模が反映している。約48ヘクタールの敷地に、110余りの建物（壮大な2つの塔を含む）が建てられた。

残念なことに、平安時代（794～1185年）に続いた天災により、西大寺の当初の建造物は多く失われてしまった。しかし、鎌倉時代（1185～1333年）の中期、僧の叡尊（1201～1290年）が西大寺を真言律のための道場として再興した。叡尊は疲れを知らぬ仏教教師であり、大茶盛式（茶席）などの西大寺の伝統を確立し、それらの伝統はその死後700年たった今も守り続けられている。西大寺は真言律宗の教えの中心地であり続けており、また地元の人々の重要な信仰の場ともなっている。